

生きる建築

[Important Cultural Properties]

ノートルダムホール本館 / ノートルダムホール東棟

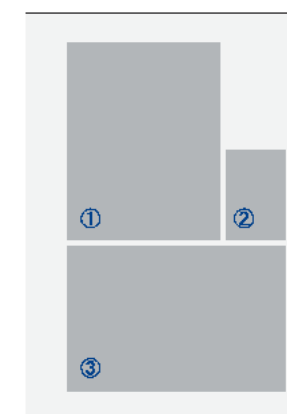
継ぐ

過去・現在・未来へ

■建物の紹介

現在も使用されているノートルダムホール本館とノートルダムホール東棟は、昭和4(1929)年に建築されたものである。設計者はアントニン・レーモンドという人物で、現在のチェコ共和国に生まれ、アメリカへ移住した建築家である。その後、世界的に著名な建築家フランク・ロイド・ライトの助手として、東京に建築された帝国ホテル(1923年竣工・現在博物館明治村に移築保存)の建設で来日することとなった。そしてこのことが縁で、東京にレーモンド建築事務所を開設し、延べ44年間にわたり日本の建築界で活躍した。〔アントニン・レーモンド〕≫ page 14

本学の本館と東棟は、日本における昭和初期のモダニズム建築(20世紀の初頭に興り、建築の歴史的様式による装飾的建物ではなく、新しい工業生産品の材料を用い、機能的で合理的な建築形態を求める)として貴重な存在である。今もその姿のままで使われ続けている素晴らしい建築遺産であることから、平成19年に文化庁から登録有形文化財として登録された。



- ①東棟 聖堂内部
- ②東棟 聖堂前廊下のステンドグラス
- ③東棟 聖堂二階の歌降席



Important Cultural Properties

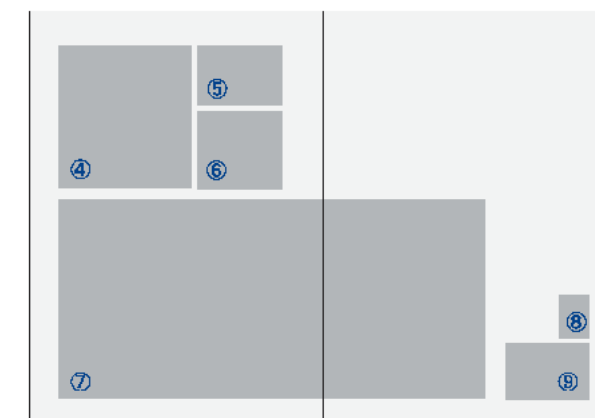
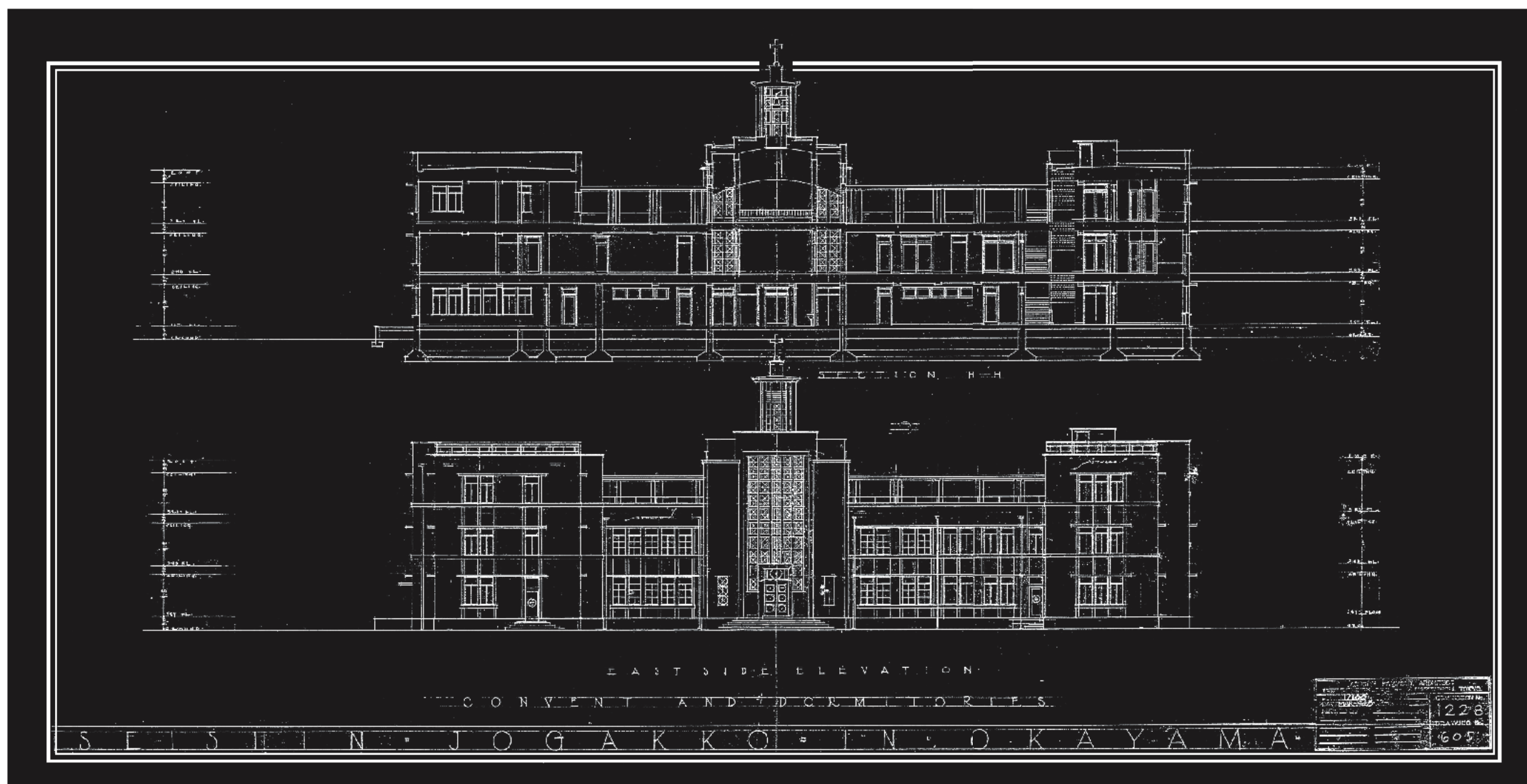


■建物の意匠・デザイン

本学の建物は、アントニン・レーモンドの初期における代表的なモダニズム建築として高く評価されている。レーモンドは、日本の伝統的な民家にも大きな影響を受け、西洋の近代建築と日本の伝統的建築を融合させる設計手法を編み出したといわれている。

これらの手法は、本学の建物にも多く見られる。例えば、日本の建物では、庇は重要な建築部位として位置づけられている。本館の建物は、二階の窓上部に水平方向に伸びた庇が設けられ、一階の窓上部にも連続したデザインで庇が取り付けられている。日本の気候条件による雨風から建物を守り、光のコントロールにも有用な技法である。水平と垂直を意識したモダンなデザインは、東棟の聖堂正面の構成に強く表現されている。長方形の窓を座標軸上に整然と配置し、天へ向かう垂直性を強調している。さらに、建物の最上部両端を切り落とし、より強く垂直性を高める効果を演出しているといえる。また、本館でも庇の水平方向への広がりとともに、規則正しく垂直方向に配列された長方形の窓形式も印象深いものである。

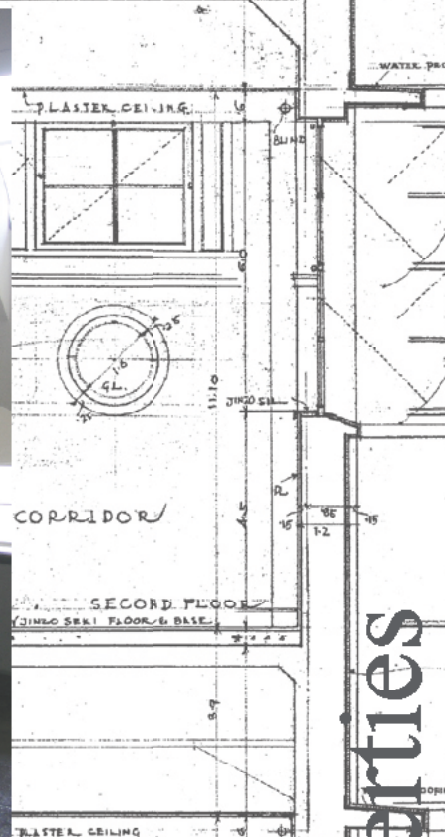
内観では、教室の引き戸は、日本における引き違いの模の意匠表現を取り入れたものと考えられる。インテリアの意匠には、「○・△・□」の特徴ある幾何学模様が多く見られる。機械的なデザインでもあるこれら幾何学模様は、大量生産を行う時の繰り返しのデザインパターンとして応用しやすい形態である。柱と窓のリズミカルな配置、丸窓、正方形と長方形の窓、三角を取り入れた美しい繰り返しのデザイン等が建築意匠表現の特徴の一つといえよう。



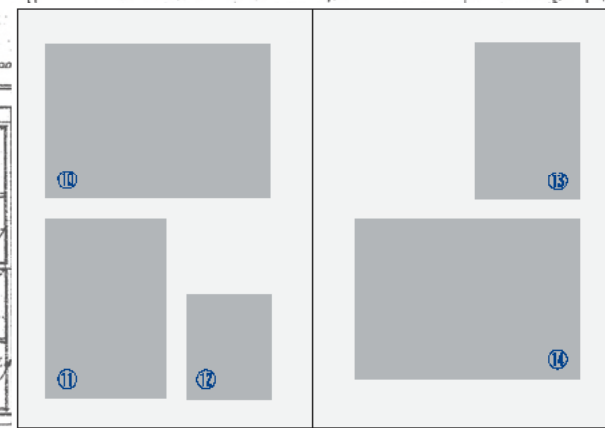
- ④本館 正面玄関まわり
- ⑤本館 中庭から見る教室の窓
- ⑥本館 教室廊下側の丸窓
- ⑦東棟の立面・断面図（原図）
- ⑧登録有形文化財の記念碑
- ⑨本館 大教室の窓デザイン



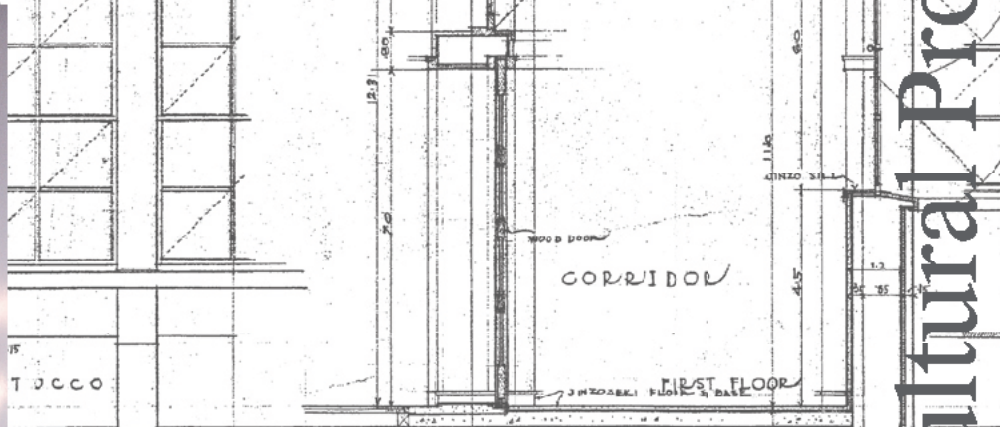
Architecture #05



Architecture #06



- ⑩本館 教室出入口
- ⑪東棟 螺旋階段
- ⑫東棟 玄関扉
- ⑬本館 階段手摺り
- ⑭東棟 聖堂内部



Important Cultural Properties

SCHOOL BUILDING

ANTONIN RAYMOND, ARCHITECT	COMMISSIONED BY
MTSUBISHI BUILDING, No. 21 MARUNOUCHI, TOKYO	122
SCALE 1/50 DRAWN BY	DRAWING NO.
DATE 1922 CHECKED BY	509
REVISED BY	

■略歴

1888年アントニン・レーモンドはボヘミアのクラドノ(現在のチェコ共和国)で生まれる。プラハ工科大学で建築を学び、卒業後にアメリカへ移住。NYでゴシック風の摩天楼ウールワース・ビルディングの設計で知られるカス・ギルバートの設計事務所に勤務。

ところが、保守的なアメリカ建築界に失望し、1914年に画家を志してイタリアに渡る。第1次世界大戦が勃発し、NYに戻る。アメリカへの最後の帰還船上で、グラフィック・デザイナーのノエミ・ベルネッサンと出逢い、NYで結婚し市民権を得る。アメリカの参戦により、徴兵され第1次世界大戦に従軍。大戦が終了するとアメリカに戻り、フランク・ロイド・ライトの事務所に勤務する。

1919年にライトとともに帝国ホテル建設のため、夫婦で来日。1922年独立し、レーモンド事務所を開設する。その後、第2次世界大戦を挟んで通算44年を日本で過ごし、個人邸宅から病院、教会、学校、ビル、倉庫まで、400余りのモダニズム建築最先端の作品を作った。また、前川國男、吉村順三、ジョージ・ナカシマなどの建築家がレーモンド事務所で学んだ。

第2次世界大戦によって帰国したが、1947年にダム建設予定地の調査のため再度来日。その後、新たに事務所を開設し、戦後の日本にモダニズムの理念に基づく秀作を多く残した。戦後の設計事務所では小規模木造住宅の設計で新境地を開いた増沢洵などが学び、名前を冠した「レーモンド設計事務所」は今も存続している。

1973年、アメリカに帰国。3年後の1976年、ペンシルヴェニア州ニューホープで永眠。享年88。

最近では2007年9月15日～10月21日に神奈川県立近代美術館で「建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド」と題した回顧展が開かれた。



アントニン・レーモンドとノエミ
ニューヨークにて 1914年頃
『建築と暮らしの手作りモダン
アントニン&ノエミ・レーモンド』
(2007)より転載

■主要作品

東京女子大学総合計画 (東京・吉祥寺/1921年)
雲南坂の家 (東京・赤坂/1924年/現存しない)
東京聖心学院 (東京・白金/1924年)
旧星商業学校 (東京・五反田/1924年/現 星薬科大学)
小林聖心女子学院本館 (兵庫・宝塚/1926年)
ライジングサン石油会社ビル (横浜・関内/1926年)
エーリスマン邸 (横浜/1927年/元町公園内に移築)
旧イタリア大使館日光別邸 (栃木・日光/1928年)
聖路加国際病院 (東京・築地/1928年/装飾のないデザインが不評、レーモンドは建設途中で解雇)
ライジングサン石油会社社宅群 (横浜・山手町/1929年/後に フェリス女学院10号館)
清心高等女学校 (岡山/1929年/現 ノートルダム清心女子大学)
トレッドソン邸 (栃木・日光/1931年)
アメリカ大使館 (東京・赤坂/1931年)
夏の家 (長野・軽井沢/1933年/移築後、現 バイネ美術館)
小寺別邸 (長野・軽井沢/1934年)
赤星鉄馬邸 (東京・吉祥寺/1934年/現 カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会)
聖ポール教会 (長野・軽井沢/1935年/現 聖パウロカトリック教会)
不二家レストラン (横浜・伊勢佐木町/1936年)
東京女子大学チャペル・講堂 (東京・吉祥寺/1937年)
スリ・オーロピンド・ゴース僧院宿舎 (インド・ボンティシエリ/1938年)
ニューホープの農場 増改築 (アメリカ・PA・ニューホープ/1939年)
リーダーズダイジェスト東京支社 (東京・一ツ橋/1951年/現存しない)
レーモンド自邸「斧町の自邸」 (東京・麻布/1951年/現存しない)
レーモンドホール (三重・津/1951年)
アメリカ大使館宿舎 (東京・赤坂/1953年)
聖アンセルモ教会・小修道院 (東京・目黒/1955年)
聖アルバン教会 (東京・芝/1958年)
国際キリスト教大学図書館 (東京・三鷹/1960年)
群馬音楽センター (群馬・高崎/1961年)
聖ミカエル教会 (札幌/1961年)
立教高等学校 校舎 (埼玉・新座/1961年)
南山大学総合計画 (名古屋・昭和区/1961年)
立教高校聖パウロ礼拝堂 (埼玉・志木/1963年)
新スタジオ (長野・軽井沢/1963年)
神言神学院 (名古屋・八雲/1964年/南山大学設立母体)
新井田カトリック教会 (新潟・新井田/1965年)
上智大学六・七号館 (東京・四谷/1968年)

Antonin & Noëmi Raymond



アントニン・レーモンドとノエミ 軽井沢にて 1965年頃 『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』(2007)より転載